



加夏子は何の迷いもなく行動に移っていた。

早朝に、看護師や医者の見回りの無い時間を見計らって病院を抜け出したのだ。

彼女にとって佐野碧は妹同然の存在だった。何もせずただ待つなんて事は考えられなかったのだ。

タクシーを使い駅まで出ると切符を買った。所持金は僅かだったが、頼りになる援軍はすぐ近くにいる筈だった。ひとつ隣の、コンビニ位しかない駅に降りると、久しく使った事の無い携帯電話を取り出し番号をプッシュした。入院中にも使えるように恒彦が買い与えたPHSだったが、電波はちゃんと届いているようだ。

「もしもし」

「ジュン、あたしよ。カナ」

「カナちゃん？ どうしたの、こんなに朝早く。僕なら明日には戻るから」

「みーちゃんが…碧ちゃんが行方不明になっちゃったの！」

「なんだって！？」

「昨日から病院じゅうが何だか騒がしくて、わたし他の患者さんとかに聞いてみたの。そしたら…」

「みーちゃんが居なくなってた、そうなんだね」

「衣笠さんは風邪でお休みだし、銀さんには怖い顔でスルーされちゃうし。お願い、協力して。一緒にみーちゃんを捜して！」

「わかった、わかったけど…捜すといったって一体どこを捜せばいいんだ？」

「それが判れば苦労しないわ。どうすればいい？」

「そういわれてもなあ～」

電話の向こうで殉が沈黙した。

とにかく迎えにきて

わたし、XX駅の裏手にいるから

電話を切ると、しばらく考え込んでから加夏子は再びボタンを押した。

「お姫サマかい。散歩にしちゃ随分と遠手したね。今どこ？」

「長官…九十九先生。わたし碧ちゃんを捜さなきゃならないの。馬鹿な事してるって判ってる、でもお願い！ 先生なら何か知ってるんじゃないですか？ 病院の関係者だし…何でもいいんです！ 知ってたら教えて下さい！ 帰ったらいっぱい叱ってもいいですから！」

九十九はすぐには答えなかった。

加夏子は息を止め、電話から声がするのを待っていた。

「君にはまだ治療が必要だ」

「えっ？」

「でもそれは、病院では出来ない類いのものかも知れない。いいだろう、行きなさい」

あの子を連れ去ったのは、衣笠君だよ

九十九の声は、どこかむなしさを含んでいた。

◇

「外出は私が許可しました。間接的治療の一環と御考え下さい」

院長室の一角で、九十九は病院長と対峙していた。

「これで二人目だぞ、九十九君。一体どうなっとるのかね！ 騒ぎが漏れないうちに早く連れ戻してきたまえ」

「ですから、清水氏の御令嬢については正式な許可を与えた上での外出だと申し上げています。御両親には私から了解を頂くつもりです。もう一人の方については、これは私の守備範囲では…」

「もうひとり？ ああ、あの片腕の子供か。そんなのは後回しでいい。清水加夏子が最優先だ」

ロイド眼鏡の奥で、九十九の目がすっと窄む。

「入院患者に事件が起これば当院の評判はガタ落ちですよ。病院が実際の成果よりも評判で成り立っている事は、院長もよく御存知な筈ですが」

「それがどうした」

「消えたのは二名、うち一名は私の監督下にあります。捜索に力を入れねばならないのは残り一名の方でしょう。最近、刑事もウロウロしているようですし」

「けっけ、刑事だとお！？」

過度に血色の良い院長の巨大な頭頂部から、堰を切ったように汗が吹き出した。

「ええ。このままだと痛くもない腹を探られるんじゃないですか」

意地悪そうに九十九がニヤリと笑う。

「うむう〜…」

しきりに汗を拭う病院長を冷ややかに見下ろしながら、九十九は次のカードを切った。

「マスコミはセンセーショナルな話題に飢えていますからねえ。入院中の子供を連れ去ったのが看護師の一人だったなんて事が判ったら、とてとても」

「何だと！ 今なんと行った！？」

「看護師ですよ。衣笠恵美子。清水加夏子の担当でもありましたからね、私もよく知っています」

「何処へいったか、それも判るといのかね」

「ええ、だいたいのところは」

「よろしい。この件は君に一任する。警察より早く子供の身柄を確保したまえ」

「それだけですか？」

「うまくいったら、それなりの待遇を約束しよう。何なら一筆書いてもいい」

「そうして頂けると助かります。それでは」

軽く頭をさげ退出しようとする九十九の背に院長のダミ声が投げられた。

しくじるなよ、九十九

もししくじったら…

判ってるだろうな！

背を向けたまま軽く手を挙げると、九十九は院長室を出た。

狸親父め

まあいい、面白くなりそうだからな

◇

殉と加夏子は向かい合って列車に揺られていた。

勿論、佐野碧を探す為であった。

車窓の外を流れる見知らぬ景色。

ありふれた四人掛けのボックス席。

通路を転がる空き缶。

「こういう時、車椅子って不便ていうか邪魔よね。折り畳みだけどさ」

「…」

「新幹線の方が早いけど、しょうがないな。ジュンだってそんなにお金、もってる訳じゃないし」

「…」

「なんか、ちょっとイイよね、二人で電車って。駆け落ちみたいで」

「…」

「ねえ、どうしたの？ 駅出てからずっとだよ。難しい顔して黙り込んで」

加夏子の声が聞こえていないかのように、殉は視線を落としたまま黙りこくっていた。

出発する直前、加夏子の乗車を手伝ってもらう為に駅員を呼びにいった際、彼を呼び止めた者がいたのだ。

◇

「殉」

「兄さん？ どうしたんだい、いきなり」

「事情は判ってる。女の子を捜しに行くんだろ」

「うん」

「遠出をするな、と言ったところで聞くような奴じゃないよな。昔から頑固だったし」

「兄さんだって。僕が何と言ったって自分の道をゆくでしょ？ 同じだよ、兄弟だし」

「そうだったな」

くっくと小さな笑い声が聞こえたと思うと、殉の手に紙幣の固まりが握らされた。

「何かあったら迷わず俺を呼べ。見かけはどうかあれ、お前の身体はもう…」

「それ以上は言わないで。判ってるよ、自分のことは、自分が一番ね」

「そうか」

兄の心に音が響いているのを殉は聞いた。

低く、哀しみに満ちたコントラバスの音。

自衛隊に入る前、兄がよく練習していたのを彼は思い出した。

「あれがお前の連れか？」

聞かれて殉ははっと我に返った。

「うん、足が不自由で大変なんだけど、碧ちゃんを捜すって言ってきかないんだ。僕がついててやらなきゃ」

「好き、なのか」

「…うん…僕、決めたんだ。生きてる限り彼女を、加夏子ちゃんを守るって」

かな…こ…だと？！

コントラバスの音が、オーケストラを丸ごと押し潰したような凄まじい轟音に一瞬で変わった。

「車椅子…下半身不随…あの女は、もしかして清水加夏子なのか…」

「そうだよ、兄さん知ってるの？」

棒のように立ちつくしている兄の姿が見えるようだった。

それ程に傍らの気配は硬直し、凍りついていた。

◇

怒った訳でも、いじけてすねたりした訳でもなかった。

加夏子はただそっと、向かいの席で黙りこくる殉の頬に触れただけだった。

俯き続けていた顔がはっと上向く。

「何を悩んでるか知らない。聞かない。私にはジュンがいる。それで充分。でもワタシが話しかけたらこっちを向いて。じゃないと寂しい」

「カナちゃん…」

「カナって呼んでいいよ。そのへんのバカップルより沢山、いろんなこと乗り越えてきたんだよ。わたしたち、一緒にさ」

殉は言葉を返せなかった。

加夏子の言葉は、心の暗雲を払う暖かな光そのものだった。

だらしのないなあ、僕は

彼女を守るって決めたんだろ

だったら何も考えることないや

カッコ悪いな

「…ごめん。ちょっと考え事してたんだ。もう大丈夫」

「かんがえごと？ だいじょーぶ？ ナア〜ニそれ、ジュンっぽくないぞお」

加夏子が屈託無く笑った。

釣られて殉も微笑む。

「そうだな、らしくないね、こんなの」

「そ〜だよ〜、銀さんや九十九先生がいたら笑われちゃってるトコだぞお」

包み込むように殉が加夏子を抱きしめる。

言葉が止まった。

「今、好きだって言ったらカナはどうする」

「…こうする…」

身体を離した加夏子の唇だけが殉のそれに重なる。

柔らかな想いが、殉から最後の躊躇いを拭い去っていった。

◇

殉と加夏子が西を目指していた、その頃。

渋谷駅前。スクランブル交差点。

慌ただしく道を渡る人、人、人…

その中に三つの人影があった。どの影も動かない。

「久しぶりだな、鴉」

影の一つが口を開いた。

「お前か」

もう一つの影が答える。

「1年も何処をほっつき歩いていたんだ？ ライオットガンは応えただろうに」

その影はくわえていた煙草を向かいの影に放る。
胸元にぶつかった煙草が火の粉を散らして路上に落ちた。

「あれでくたばるとは思っちゃいないだろうが」

その影は足下の煙草をにじり潰した。

「俺とはまだ、だったな。やるか？ ここで」

沈黙を守っていたもう一つのガッシリした影がぼそりと言った。

「止めておこう。他にやらなきゃならん事があるんでな」
「貴様に『殺し』以外でやる事なんぞあるのか。お楽しみなら後にしろ」
「ある。楽しみじゃないが、な」

それ以上、どの影も動かさなかった。
信号が変わる。

促されるように、三つの影はその場から離れていった。